



英語学習辞書における単母音の発音表記の異同

岩 井 茂 昭

概要 英語学習辞書（英和辞書および英英辞書）における発音記号は英語の発音体系を論理的に学ぼうとする学習者にとって有益なツールである。しかし、それぞれの学習辞書が採用している発音表記の方法にばらつきがあるため、学習者は発音記号の習得にとまどうことが多い。このことが英語教育において発音記号が十分に活用されていないひとつの原因ではないかと筆者は考える。本論においては、まず英語の発音記号に関する予備知識を概観した上で、現在出版されている内外の英語学習辞書における単母音の音声表記を比較対照し、その異同の性質の分析に基づいて、英語学習にとって合理的な発音表記の体系について考察する。

キーワード 英語学習辞書, 発音記号, 単母音

原稿受理日 2006年9月20日

Abstract For learners who aim at a clear and logical understanding of the English pronunciation system, phonetic symbols provided in learners' English dictionaries can be a powerful tool if they are properly used. However, it often happens that Japanese learners become confused by the variation of phonetic symbols between dictionaries, which can cause them to give up learning the symbols. This can also hinder effective utilization of phonetic symbols in English classes in Japan. This paper surveys the variation of phonetic transcriptions from samples of learners' English dictionaries currently published in Japan and abroad, and compares details of transcriptions of monophthongs, aiming to produce a more accessible and educationally fertile table of phonetic symbols.

Key words learner's English dictionary, phonetic symbols, monophthongs

1. は じ め に

地理的、歴史的などさまざまな要因によって多くの日本人は英語の発音を日常生活の中で自然に身につけることが難しい。そのため、日本において英語の発音を学ぼうとする者は、ネイティブ・スピーカーによる授業を受けるか、あるいは、普及している視聴覚的英語教材を活用して学習することになる。しかし、いずれの場合も時間的制約や双方向的コミュニケーションの欠如などの制約があるため、学習者が英語の発音を「自然」に身につけることは難しく、習得のためには何らかの意識的、論理的なアプローチが必要になってくる。

英語の発音に意識を向け、その発音体系を論理的に理解する上で、英語学習辞書の発音記号は有益なツールとなりうる。ひとたび発音記号に対応する音声を聴き分け、発声できるようになれば、発音記号の記載されている辞書のすべての英単語の発音が身近なものとなるからである。だが、現在の日本では英語の発音教育において発音記号が十分に活用されているとはいえない状況ではないだろうか。そして、その原因のひとつとして英語学習辞書における発音表記のばらつきがあると考えるのが本論の前提である。

以下、英語の発音表記に関する予備知識を整理した上で、現在出版されている内外の英語学習辞書における単母音の音声表記を比較対照し、その異同の性質の分析に基づいて、より合理的で使いやすい発音表記の体系について考察を進めていきたい。

2. 国際音声字母と現状の発音表記

日本で出版されている英和辞書、および海外で出版されている外国人学習者向けの英英辞書における発音表記は基本的に国際音声学協会（International Phonetic Association：略称 IPA）が制定している国際音声字母（International Phonetic Alphabet：略称 IPA）に準拠している。国際音声学協会は1886年の創立以来、活動の一環として世界中の言語音声を表記するための国際音声字母の改訂を続けている。

音声学の進歩に伴って言語音声の観察精度が増し、聴覚的に微細な差異を表記する必要性から、複雑な記号を用いた高度に専門的な精密表記（narrow transcription）が発展してきた。それと合わせて、実用上の要請から意味の弁別に必要な最低限の音声記号を用いる簡易表記（broad transcription）と呼ばれるものも作られてきた。

精密表記と簡易表記は音声学の分野で言語の音声を記録するために用いられるため、両者をまとめて音声表記 (phonetic transcription)、その表記に用いられる記号を音声記号 (phonetic symbol) と呼ぶ。それに対して、言語学の観点から特定の言語体系を形成する音素 (phoneme) を表記することを音素表記 (phonemic transcription) と呼び、そのために用いられる記号を音素記号 (phonemic symbol) と呼ぶ。音素は特定言語における音声の位置づけを示す単位であるため、音素記号によって表される音の実際の響きは各言語によって異なっている。この音素表記は表記の上では実質的に音声表記の簡略表記に近いものとなるため、現在では音素表記に対応する簡略表記を // (2本の斜線) で囲み、精密表記をする場合には [] (かぎ括弧) で囲んで表現するということが音声学では行われている。英語学習辞書においても最近はほとんどのものが // を用いて発音を示している。

英語学習辞書における音声の表記は、日本語では一般に「発音表記」(英語では音声表記と同じく phonetic transcription) と呼ばれ、表記に用いられる記号を「発音記号」(同じく英語では phonetic symbol) と呼ぶ。この発音表記は意味の弁別に必要な英語の音素に加えて、音素としては同一と解釈できても実際の音色が異なるものを異音として表記したものである。例えば、/a/ という英語の音素に対して、実際の発音表記では /æ/ や /ɑ:/ という異なる記号が用いられる。このように、音素表記 (= 簡略表記) に異音表記 (= 精密表記) を加えたものが英語学習辞書における発音表記であり、これを竹林 (1996) は教育表記 (pedagogical transcription) と呼んでいる。

現在内外で出版されている英語学習辞書の発音表記は教育表記であるが、採用されている発音記号の種類が辞書によって異なっており、まったく同じ発音記号表が掲載されている辞書は同じ編集者が同じ出版社から出版したものだけであると言ってよい。それぞれの辞書において音声学の専門家がなんらかの原則に基づいて発音表記を決定しているのだが、学習者の立場から見れば、本来同じであるはずの英語の発音が、異なる表記方式によって提示されるというのは学習の効率上好ましいことではない。例えば、同じ学校の同じクラスで発音を学ぶ学習者たちの間で、使っている辞書によって発音表記が異なっている授業が停滞するのは必然であろう。本論では日本人学習者にとって発音記号の習得が英語音声の理解と習得に寄与するものであるということを前提に、以下、まず内外の英語学習辞書における発音表記の異同を精査し、その結果を踏まえた上で、より合理的で使いやすい発音表記体系提案の可能性を探ってみたい。

3. 各辞書の単母音の発音表記の対照

3.1 比較サンプルとする辞書の選択について

比較対象とする英語学習辞書のサンプルは一般的な普及度が高いと思われる中級以上の英語学習者向けの英和辞書および英英辞書から選んだ。中級者向け辞書の基準として収録語彙の見出し数10万語前後（実際には6万6千語から13万5千語程度までのばらつきがある）を目安とし、また学習辞書の満たす要件は用例が豊富であり語法や文法に関する詳しい解説が盛り込まれていることである。このような基準に基づいて、日本国内で出版されている10種類の英和学習辞書と、海外で出版されている外国人学習者向けの4種類の英英学習辞書を選んだ。比較の際には各辞書の名称を記号化し、英和辞書は J1, J2 のように表記し、英英辞書は E1, E2 のように表記するが、それぞれの書誌情報は末尾に参考文献としてあげておく。なお、英和学習辞書の中には同じ編集者が同じ出版社から出版しているものがあり（J4 と J5）、発音表記の原則はほぼ同一であるが、知名度、普及度を考慮して両方をサンプルに含めることとした。

3.2 比較の方法と記述について

実際の比較は以下の原則に基づいて行った。

1. ここでは英語音声のうち単母音のみを比較の対象とした。二重母音、三重母音および子音の比較は別稿で行うこととする。サンプルとして選んだ辞書のすべての単母音表記を網羅するために、単母音には「短母音」、「長母音」、「両者のR音性化母音」、「短母音+子音 /r/」、「長母音+子音 /r/」を含めている。
2. サンプル間の対照を容易にするとともに、個々の発音に関する一般的情報や単語例、特定の辞書固有の表記に関する注をつけるために、1つの発音項目につき1つの比較対照表を作成した。ここでいう1つの発音項目には実際には複数の表記方法（「発音記号」）が含まれる。例えば、「R音性化される /ə/」の音は、各辞書の表記上は /ər/, /əː/, /ə|ə/, /ə/ などの記号で出現する。発音項目として32を設定したが、これは今回のサンプル全体を検討した上で決定した数で、すべての発音記号が表す発音の総数である。なお、各発音項目冒頭の丸数字直後の発音表記は、14冊の辞書の中で使用頻度の高いものを便宜的に代表としてあげてある。
3. 米音と英音が常に異なる音にはR音性化母音とそれ以外のものがある。R音性化母音

はほとんどの辞書において1つの記号で表記しているため、比較対照表も1つとした。

R音性化母音以外の米音と英音が異なる母音は、多くの辞書で併記方式（/æ|ɑ:/などのように、米音と英音を縦線で区切る）を採用しているため、異なる発音項目として2つの比較対照表を用意した。つまり、この例では米音 /æ/ で1つ、英音 /ɑ:/ で1つの比較対照表となる。

4. 比較対照表において、対象となる発音項目が各辞書の発音記号表に記載されていない場合、表の該当欄を灰色地とし、辞書本文中で実際にどのように記述されているかを示した。

3.3 各辞書における単母音表記の比較対照

A. 短母音

① /i/

方言：米英共通音

表記：/i/

単語：create /kri*é*It/ happy /hæp*i*/ very /vé*r*i/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	i	i	i	i	i	i	i	i	i	i
E	i	i	i	i						

- J2 の発音記号表に /i/ はないが、本文中では /i/ が用いられている。

② /ɪ/

方言：米英共通音

表記：/ɪ/

単語：busy /bɪ*z*i/ sit /sɪ*t*/ win /wɪ*n*/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	i	ɪ	i	ɪ	ɪ	ɪ	i	i	i	ɪ
E	ɪ	ɪ	ɪ	ɪ						

- J1, J3, J7, J8, J9 の本文では /i/ を用いて記述している。

③ /e/

方言：米英共通音

表記：/e/

単語：bed /béd/ end /énd/ ten /tén/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
E	e	e	e	e						

④ /æ/ [タイプⅠ]

方言：米英共通音

表記：/æ/

単語：bag /bæg/ cat /kæt/ man /mæn/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	æ	æ	æ	æ	æ	æ	æ	æ	æ	æ
E	æ	æ	æ	æ						

⑤ /æ/ [タイプⅡ] (米英異音母音)

方言：米音

表記：/æ|ɑ:/ (英和辞書のみ)

単語：ask /æsk|ɑ:sk/ fast /fæst|fa:st/ laugh /læf|la:f/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	æ	æ ɑ:	æ ɑ:	æ ɑ:	æ ɑ:	æ ɑ:	æ ɑ:	æ ɑ:	æ	æ
E	æ	æ	æ	æ						

- ・米音に特有の /æ/ の発音。英音では常に /ɑ:/ と発音される。(②参照)。
- ・/æ/ の音という点では④と同じだが、対応する英音が異なるということを明示しているのが /æ|ɑ:/ という発音併記である。

⑥ /ɑ/ (米英異音母音)

方言：米音

表記：/ɑ/, /ɑ|ɔ/, /ɑ(ɔ)|ɔ/, /ɑ:/ (英英辞書4冊すべて /ɑ:/)

単語：box /báks|bóks/ got /gát|gót/ not /nát|nót/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɑ	ɑ(ɿ)ɔ	ɑɔ	ɑɔ	ɑɔ	ɑɔ	ɑɔ	ɑ	ɑ	ɑɔ
E	ɑː	ɑː	ɑː	ɑː						

- ・英和辞書の発音記号表においては /ɑ/, /ɑɔ/, /ɑ(ɿ)ɔ/ という異なる表記があるが、英英辞書においてはすべて /ɑː/ となっている。したがって、上記の同じ単語を表記するのに英英辞書では次のようになる。

box /báks|bóks/ got /gá:t|gót/ not /ná:t|nót/

ここでは英和辞書の記述と比較しやすくするために米音・英音の順序に発音表記をしたが、英英辞書では英音・米音の順序が一般的である。また、/ɑː/ の米音に対応する英音が英和辞書とは異なって /ɒ/ であることに注意。（⑦参照）。

- ・/ɑ/ は英和辞書においてのみ、また、米音のみに用いられる。米音でこの発音をする場合、英音は規則的に異なる発音となる。それは英和辞書においてはすべて /ɔ/ と表記される音である。英英辞書の場合には、英音のみに用いられる /ɒ/ に規則的に対応する米音がここでの /ɑː/ である。（⑦を参照。）
- ・J2 の解説に「/ɑ/ の音は、伝統的に短母音として記述されることが多かったが、実際には長母音 /ɑː/ と同じと考えて、/ɑː/ と表記する辞典も増えている。本辞典では、長音記号を（ ）に入れて（ː）で示す」とある。

⑦ /ɔ/ [タイプ I]（米英異音母音）

方言：英音

表記：/ɑɔ/, /ɑ(ɿ)ɔ/, /ɔ/, /ɒ/（英英辞書 4 冊すべて /ɒ/）

単語：box /báks|bóks/ got /gát|gót/ not /nát|nót/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɑ	ɑ(ɿ)ɔ	ɑɔ	ɑɔ	ɑɔ	ɑɔ	ɑɔ	ɑ	ɔ	ɑɔ
E	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ						

- ・J1, J8 以外の英和辞書では /ɔ/（/ɑɔ/, /ɑ(ɿ)ɔ/）という表記だが、英英辞書においてはすべて /ɒ/ となっている。（⑥を参照）
- ・英音でこの /ɔ/ の発音をする場合、対応する米音の表記は英和辞書においては常に /ɑ/ または /ɑ(ɿ)/（⑥）である。
- ・/ɒ/ は英英辞書においてのみ見られる表記である。英音でこの発音をする場合、米音では常に /ɑː/（⑥）となる。

- ・ J1 の発音記号表に /ɔ/ はない。解説において「米英で /ɑ/ と /ɔ/ が異なる場合は、いちいち両者を併記せず、米音だけを示した」という規則が述べられている。
- ・ J8 の発音記号表に /ɔ/ はない。発音記号表への注で米音 /ɑ/ と英音 /ɔ/ の対応が記述されている。

⑧ /ɔ/ [タイプⅡ] (米英異音母音)

方言：英音

表記：/ɔ:|ɔ/, /ɔ(:)/ (英和辞書のみ)

単語：dog /dɔ:ɡ|dɔɡ/ long /lɔ:ɒ|lɒ/ soft /sɔ:ft|sɔft/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɔ(:)	ɔ: ɔ	ɔ(:)	ɔ: ɔ	ɔ: ɔ	ɔ: ɔ	ɔ: ɔ	ɔ(:)	ɔ: ɔ	ɔ: ɔ
E	ɒ	ɒ	ɒ	ɒ						

- ・ この /ɔ/ は英和辞書においてのみ、また、英音のみに用いられる。英音でこの発音をする場合、米音では常に /ɔ: / (㉔) である。
- ・ 英英辞書4冊ではこのタイプの /ɔ/ を㉔の /ɔ/ (英英辞書の表記は共通して /ɒ/) と区別していない。英英各辞書における米英の発音表記の対応関係を見ると、E1 では /ɑ:/, E2 と E4 では /ɔ:/, E3 では /ɒ:/ となっている。ちなみに、この E3 の米音表記 /ɒ:/ は、英英辞書の中で唯一この⑧の英音 /ɔ/ (E3 では /ɒ/) との対応関係を明示する表記である。(㉔参照)
- ・ J1 の発音記号表に /ɔ/ または /ɔ(:)/ はないが、本文中では /ɔ(:)/ を用いて記述されている。ただし、dog の記述は /dɔ:ɡ, dɔɡ/ となっており、これは、「米音で /dɔ:ɡ/ または /dɔɡ/ と発音する。/dɔɡ/ という米音表記をしているので、対応規則に従って英音では /dɔɡ/ と発音する」ということになる。
- ・ J9 の発音記号表には㉔の /ɔ:/ と区別がつけられていないが、本文中では米音と英音を併記している。

⑨ /u/

方言：米英共通音

表記：/u/

単語：actual /æktʃuəl/ graduation /grædʒuəʃən/ influence /ɪnfluuəns/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	u	u	u	u	u	u	u	u	u	u
E	u	u	u	u						

- J2 の発音記号表には /u/ はないが、本文中の記述では用いられている。

⑩ /ʊ/

方言：米英共通音

表記：/ʊ/

単語：book /bʊk/ could /kʊd/ put /pʊt/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	u	ʊ	u	ʊ	ʊ	ʊ	u	u	u	ʊ
E	ʊ	ʊ	ʊ	ʊ						

- J1, J3, J7, J8, J9 では /u/ を用いて記述している。

⑪ /ʌ/

方言：米英共通音

表記：/ʌ/

単語：come /kʌm/ must /mʌst/ run /rʌn/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ
E	ʌ	ʌ	ʌ	ʌ						

⑫ /ʌr/ （/ʌr/ は短母音 /ʌ/ に子音 /r/ が続くものを母音と考える表記）（米英異音母音）

方言：英音

表記：/ə:r|ʌr/

単語：current /kə:rənt|kʌrənt/ courage /kə:rɪdʒ|kʌrɪdʒ/ hurry /hə:ri|hʌri/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ʌr	ə:r ʌr	ʌr	ʌr	ʌr	ʌr	ə:r ʌr	ə:r ʌr	ʌr	ʌr
E	ʌr	ʌr	ʌr	ʌr						

- /ʌr/ を発音記号表に含めているのは J2, J7, J8 のみである。その他の辞書におい

でも実際の表記は /ʌr/ になっているが、これは短母音 /ʌ/ + 子音 /r/ であって、
/ʌr/ というひとまとまりを J2, J7, J8 のように母音として解釈しているのではない。

- /ʌr/ は英音のみに用いられる。米音では常に異なる発音となる。その米音は英和辞書においては /ə:r/ または /æ:r/ と表記される音である。英英辞書の場合には、その米音は /ɜ:r/ または /ɝ:r/ と表記される。(㊸参照)。

⑬ /ə/ [タイプ I]

方言：米英共通音

表記：/ə/

単語：about /əbaʊt/ collect /kəlekt/ lemon /ləmən/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ə	ə	ə	ə	ə	ə	ə	ə	ə	ə
E	ə	ə	ə	ə						

⑭ /ə/ [タイプ II] (R 音性化関連母音)

方言：英音

表記：ə|ə (J4, J5 のみ)

単語：forget /fəɡét|fəɡét/ perhaps /pəhæps|pəhæps/

Saturday /sætədei|sætədei/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ər	ər	ər	ə ə	ə ə	ər	ər	ər	ər	ər
E	ə ə	ər	ər ə	ər ə						

- この /ə/ は英和辞書の J4, J5 のみに用いられている。英音でこの発音をする場合、米音では常に R 音性化される。(㊵, ㊶参照)
- 他の英和辞書では /ər/ または /əʳ/ という表記で、「米音は /ər/, 英音は /ə/ と発音する」という規則を設けている。
- E1, E3, E4 の本文中でも /ə|ə/ または /ər|ə/ という形で英音は /ə/ で表記されている。
- E2 では /əʳ/ を用いることで「米音は /ər/, 英音は /ə/ と発音する」という規則が設けられている。

⑮ /ər/ [タイプ I] (R 音性化母音)

方言：米英異音

表記：/ər/, /ə˞/, /ə|ə/

単語：forget /fərgét/ perhaps /pərhæps/ Saturday /sætədeɪ/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ər	ər	ə˞	ə ə	ə ə	ər	ər	ər	ər	ər
E	ə ə	ə˞	ər ə	ər ə						

- /ər/（または /ə˞/, または /ə/）は、米音では /ə/ が R 音性化され、英音では R 音性化されない /ə/ のままであることを示す。
- J9 では発音記号表に記載されていないが、注として「発音記号 [r] が [r] のような斜字体になっているのは、この音が発音される場合と発音されない場合の両方があることを示しています」とある。
- E1 は発音記号表に R 音声化される米音 /ə/ をあげている。(⑰参照)
- E3, E4 の本文では米音を /ər/, 英音を /ə/ として併記している。この表記方法は他のタイプ I の R 音性化母音と共通である。

⑯ /ər/ [タイプ II] (R 音性化母音)

方言：米英異音または米英共通 R 音

表記：(/ə|ə˞/, /ə˞/, /ə(r)/) (いずれも E1, E2, E4 の本文中での表記)

単語：actor /æktə(r)/ cover /kʌvə(r)/ sister /sɪstə(r)/ (E4 本文中の表記例より)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ər	ər	ə˞	ə ə	ə ə	ər	ər	ər	ər	ər
E	ə ə˞	ə˞	ər ə	ə(r)						

- この /ər/ を⑮の /ər/ と明確に区別する別の発音記号を発音記号表に記載している辞書はサンプルの中にはひとつもない。この音は語末において、米音では常に R 音性化され、英音では続く単語の語頭が母音である場合に R 音性化されるものである。
- E1 の本文中では /ə|ə˞/ としており、⑮の /ə|ə/ と区別している。
- E2 は⑮と共通の /ə˞/ を用いているが、発音記号表の下で /r/ 記号の用法を解説しており、「英音ではこの記号がついた母音の後ろに母音が続く場合にのみ /r/ の音が発音される。米音では常に /r/ の音が発音される」となっている。

- ・ E4 の本文中では /ə(r)/ としており, ⑮の /ər | ə/ と区別している。
- ・ すべての英和辞書および E3 においては⑮と⑯の区別がつけられていない。

⑰ /ə/ (R 音性化母音)

方言：米音

表記：/ə/, ə | ə (J4, J5, E1 のみ)

単語：forget /fəɡét|fəɡét/ perhaps /pəhəps | pəhəps/

Saturday /sætədei | sətədei/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ə	ər	əʳ	ə ə	ə ə	ər	ər	ər	ər	ər
E	ə	əʳ	ər ə	ə(r)						

- ・ /ə/ は米音のみに使われ /ə/ が R 音性化されることを示す記号である。
- ・ 英和辞書 J4, J5, および英英辞書 E1 でのみ使われている。

B. 長母音

⑱ /i:/

方言：米英共通音

表記：/i:/

単語：meat /mí:t/ people /pí:pl/ week /wí:k/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	i:	i:	i:	i:	i:	i:	i:	i:	i:	i:
E	i:	i:	i:	i:						

⑲ /ɑ:/ [タイプ I]

方言：米英共通音

表記：/ɑ:/

単語：calm /kɑ:m/ father /fɑ:ðər/ palm /pɑ:m/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɑ:
E	ɑ:	ɑ:	ɑ:	ɑ:						

⑩ /ɑː/ [タイプⅡ]

方言：英音

表記：/æ|ɑː/ (英和辞書のみ)

単語：ask /æsk|ɑːsk/ fast /fæst|fɑːst/ laugh /læf|lɑːf/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɑː	æ ɑː	æ ɑː	æ ɑː	æ ɑː	æ ɑː	æ ɑː	æ ɑː	ɑː	ɑː
E	ɑː	ɑː	ɑː	ɑː						

- この /ɑː/ は英音にのみ特有の /ɑː/ で、米音では常に /æ/ と発音される。(⑤参照)

⑪ /ɑːr/ [タイプⅠ] (R音性化母音)

方言：米英異音

表記：/ɑːr/, /ɑːʳ/, /ɑə/

単語：arm /ɑːrm/ heart /hɑːrt/ park /pɑːrk/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɑːr	ɑːr	ɑːʳ	ɑə	ɑə	ɑːr	ɑːr	ɑːr	ɑːr	ɑːr
E	ɑːr ɑːʳ	ɑːʳ	ɑːr ɑːʳ	ɑːr ɑːʳ						

- /ɑːr/ は、米音では /ɑː/ がR音性化され、英音ではR音性化されない /ɑː/ のままであることを示す。
- J4, J5 の /ɑə/ は二重母音として扱われている。解説において「《米》では /ɑ/ の後に軽く /ə/ をつける。一方《英》では二重母音ではなくて長母音 /ɑː/ となる」と説明されている。
- E1, E3, E4 の本文では米音を /ɑːr/, 英音を /ɑː/ として併記している。この表記方法は他のタイプⅠのR音性化母音と共通である。

⑫ /ɑːr/ [タイプⅡ] (R音性化母音)

方言：米英異音または米英共通R音

表記：(/ɑːr|ɑːʳ/, /ɑːʳ/, /ɑː(r)/ (いずれも E1, E2, E4 の本文中での表記)

単語：bar /bɑː(r)/ car /kɑː(r)/ far /fɑː(r)/ (E4 本文中の表記例より)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɑːr	ɑːr	ɑːʳ	ɑə	ɑə	ɑːr	ɑːr	ɑːr	ɑːr	ɑːr
E	ɑːr ɑːʳ	ɑːʳ	ɑːr ɑːʳ	ɑː(r)						

- この /ɑ:r/ を㉑の /ɑ:r/ と区別する別の発音記号を発音記号表に記載している辞書はサンプルの中にはひとつもない。この音は語末において、米音では常にR音性化され、英音では続く単語の語頭が母音である場合にR音性化されるものである。
- E1 の本文中では /ɑ:r | ɑ:r/ としており、㉑の /ɑ:r | ɑ:r/ と区別している。
- E2 は㉑と共通の /ɑ:r/ を用いているが、発音記号表の下で /r/ 記号の用法を解説しており、「英音ではこの記号がついた母音の後ろに母音が続く場合にのみ /r/ の音が発音される。米音では常に /r/ の音が発音される」となっている。
- E4 の本文中では /ɑ:(r)/ としており、㉑の /ɑ:r | ɑ:r/ と区別している。
- すべての英和辞書および E3 においては㉑と㉒の区別がつかない。

㉑ /ɔ:/ [タイプ I]

方言：米英共通音

表記：/ɔ:/

単語：all /ɔ:l/ law /lɔ:/ story /stɔ:ri/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:
E	ɔ:	ɔ:	ɔ:	ɔ:						

㉒ /ɔ:/ [タイプ II] (米英異音母音)

方言：米音

表記：/ɔ: | ɔ/, /ɔ(:)/, /v:/

単語：cloth /klɔ:θ | klɔθ/ dog /dɔ:g | dɔg/ soft /sɔ:ft | sɔft/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɔ(:)	ɔ: ɔ	ɔ(:)	ɔ: ɔ	ɔ: ɔ	ɔ: ɔ	ɔ: ɔ	ɔ(:)	ɔ: ɔ	ɔ: ɔ
E	ɑ:	ɔ:	v:	ɔ:						

- この /ɔ:/ は米音にのみ特有の /ɔ:/ で、対応する英音では常に /ɔ/ (英英辞書の英音表記では /v/) と発音される。
- J1 の発音記号表では㉑の /ɔ:/ と区別がつけられていないが、本文中では /ɔ(:)/ としている。
- J9 の発音記号表では㉑の /ɔ:/ と区別がつけられていないが、本文中では米音と英音を併記している。

- ・英英辞書の中で㉓の /ɔ:/ と区別をつけるために /ɒ:/ という発音記号を用いているのは E3 のみである。
- ・E1 では /ɔ:/ の代わりに /ɑ:/ が使われている。

㉔ /ɔ:r/ [タイプ I] (R 音性化母音)

方言：米英異音

表記：/ɔ:r/, /ɔ:ː/, /ɔə/

単語：morning /mɔ:rnɪŋ/ order /ɔ:rdə/ warm /wɔ:rm/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɔ:r	ɔ:r	ɔ:ː	ɔə	ɔə	ɔ:r	ɔ:r	ɔ:r	ɔ:r	ɔ:r
E	ɔ:r ɔ:	ɔ:ː	ɔ:r ɔ:	ɔ:r ɔ:						

- ・/ɔ:r/ は、米音では /ɔ:/ が R 音性化され、英音では R 音性化されない /ɔ:/ のままであることを示す。
- ・J4, J5 の /ɔə/ は二重母音として扱われている。解説において「《米》では /ɔ/ の後に軽く /ə/ をつける。一方《英》では二重母音ではなくて長母音 /ɔ: となる」と説明されている。
- ・E2 の発音記号表では /ɔ:/ となっているが、例としてあげられている more, cord とともに本文の表記では /ɔ:ː/ となっているため、発音記号表の誤植と思われる。
- ・E1, E3, E4 の本文では米音を /ɔ:r/, 英音を /ɔ:/ としてそれぞれ記載している。この表記方法は他のタイプ I の R 音性化母音と共通である。

㉕ /ɔ:r/ [タイプ II] (R 音性化母音)

方言：米英異音または米英共通 R 音

表記：/ɔ:r|ɔ:ː/, /ɔ:ː/, /ɔ:(r)/ (いずれも E1, E2, E4 の本文中での表記)

単語：door /dɔ:(r)/ four /fɔ:(r)/ store /stɔ:(r)/ (E4 本文中の表記例より)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɔ:r	ɔ:r	ɔ:ː	ɔə	ɔə	ɔ:r	ɔ:r	ɔ:r	ɔ:r	ɔ:r
E	ɔ:r ɔ:ː	ɔ:ː	ɔ:r ɔ:	ɔ:(r)						

- ・この /ɔ:r/ を㉔の /ɔ:r/ と区別する別の発音記号を発音記号表に記載している辞書はサンプルの中にはひとつもない。この音は語末において、米音では常に R 音性化され、英音では続く単語の語頭が母音である場合に R 音性化されるものである。

- E1 の本文中では /ɔ:r|ɔ:/ としており、㉕の /ɔ:r|ɔ:/ と区別している。
- E2 は㉕と共通の /ɔ:/ を用いているが、発音記号表の下で /r/ 記号の用法を解説しており、「英音ではこの記号がついた母音の後ろに母音が続く場合にのみ /r/ の音が発音される。米音では常に /r/ の音が発音される」となっている。
- E4 の本文中では /ɔ:(r)/ としており、㉕の /ɔ:r|ɔ:/ と区別している。
- すべての英和辞書および E3 においては㉕と㉖の区別がつけられていない。

㉗ /u:/

方言：米英共通音

表記：/u:/

単語：lose /lú:z/ school /skú:l/ too /tú:/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	u:	u:	u:	u:	u:	u:	u:	u:	u:	u:
E	u:	u:	u:	u:						

㉘ /ə:r/ [タイプ I] (R 音性化母音)

方言：米英異音

表記：/ə:r/, /əː/, /ə:|ə:/, /ɜː/

単語：bird /bǎ:rd/ early /ǎ:rli/ word /wǎ:rd/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ə:r	ə:r	əː	ə: ə:	ə: ə:	ə:r	ə:r	ə:r	ə:r	ə:r
E	ɜː ɜː	ɜː	ɜ:r ɜː	ɜ:r ɜː						

- この音は、米音では /ə:/ が R 音性化され、英音では R 音性化されない /ə:/ のままであることを示す。
- 英和辞書では /ə:/ の音を基本とした表記だが、英英辞書では /ɜː/ を基本としている。
- R 音性化された米音に対応する英音を表記するのに /ə:/ (英和辞書) または /ɜː/ (英英辞書) を用いる場合がある。(㉙参照)。

㉙ /ə:r/ [タイプ II] (R 音性化母音)

方言：米英異音または米英共通 R 音

表記：/ɜː|ɜːʳ/, /ɜːʳ/, /ɜː(r)/ （いずれも E1, E2, E4 の本文中での表記）

単語：fur /fɜː(r)/ occur /əkɜː(r)/ recur /rɪkɜː(r)/ （E4 本文中の表記例より）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɜːr	ɜːr	ɜːʳ	ɜː ɜː	ɜː ɜː	ɜːr	ɜːr	ɜːr	ɜːr	ɜːr
E	ɜː ɜːʳ	ɜːʳ	ɜːr ɜː	ɜː(r)						

- この /ɜːr/ を㊸の /ɜːr/ と区別する別の発音記号を発音記号表に記載している辞書はサンプルの中にはひとつもない。この音は語末において、米音では常に R 音性化され、英音では続く単語の語頭が母音である場合に R 音性化されるものである。
- E1 の本文中では /ɜː|ɜːʳ/ としており、㊸の /ɜː|ɜː/ と区別している。
- E2 は㊸と共通の /ɜːʳ/ を用いているが、発音記号表の下で /ʳ/ 記号の用法を解説しており、「英音ではこの記号がついた母音の後ろに母音が続く場合にのみ /r/ の音が発音される。米音では常に /r/ の音が発音される」となっている。
- E4 の本文中では /ɜː(r)/ としており、㊸の /ɜːr|ɜː/ と区別している。
- すべての英和辞書および E3 においては㊸と㊹の区別がつけられていない。

㊸ /əː/ （R 音性化母音）

方言：米音

表記：/əː|əː/, /ɜː/

単語：bird /bɜːrd/ early /ɜːrli/ word /wɜːrd/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ɜːr	ɜːr	ɜːʳ	ɜː ɜː	ɜː ɜː	ɜːr	ɜːr	ɜːr	ɜːr	ɜːr
E	ɜː	ɜːʳ	ɜːr ɜː	ɜːr ɜː						

- /əː/ (E1 では /ɜː/) は米音特有の R 音声化される発音で、対応する英音は R 音性化されない。
- この米音のみを表記する発音記号は英和辞書では J4 と J5 にのみ見られ、英英辞書では E1 のみに見られる。対応する英音はそれぞれ /əː/ または /ɜː/ である。(㊸参照)。

㊹ /əː/ （英英辞書 3 冊では /ɜː/）（R 音性化関連母音）

方言：英音

表記：/əː|əː/, /ɜː/

単語：bird /bá:d | bá:d/ early /ǎ:li | ǎ:li/ word /wá:d | wá:d/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ə:r	ə:r	əː	əː əː	əː əː	ə:r	ə:r	ə:r	ə:r	ə:r
E	ɜː	ɜː	ɜː	ɜː						

- /əː/ (英英辞書では /ɜː/) は英音特有の発音で、対応する米音は常に R 音性化される。
- この音を発音記号表に採用している英和辞書 J4, J5 では /əː/ という表記だが、英英辞書では /ɜː/ である。
- 英英辞書では E1 のみが米音 /ɜː/⑩と英音 /ɜː/ を分けて発音記号表に記載している
- E2 は発音記号表記載の /ɜːː/ のみを使って記述し、E3 と E4 は /ɜː/ のみを発音記号表に記載し、本文中では米音 /ɜːr/ と英音 /ɜː/ を併記している。

⑩ /əːr/ (/əːr/ は長母音 /əː/ に子音 /r/ が続くものを母音と考える表記)(米英異音母音)

方言：米音

表記：/əːr/, /əːr|ʌr/

単語：current /kǎ:rənt | kʌrənt/ courage /kǎ:rɪdʒ | kʌrɪdʒ/ hurry /há:ri | hʌri/

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
J	ə:r	ə:r ʌr	ə:r	ə:r	ə:r	ə:r	ə:r ʌr	ə:r ʌr	ə:r	ə:r
E	ɜːr	ɜːr	ɜːr	ɜːr						

- /əːr/ は米音のみに用いられる。英音では規則的に異なる発音となる。その英音はすべての辞書において /ʌr/ と表記される音である。(⑩参照)。
- /əːr/ を発音記号表に含めているのは J1, J2, J7, J8 のみである。その他の辞書においても実際の記述は /əːr/ または /əːr/ (英英辞書の記述では /ɜːr/ または /ɜːr/) になっているが、これは長母音 /əː/ (/əː/) + 子音 /r/ であって、/əːr/ というひとまとまりを J1, J2, J7, J8 のように母音として解釈しているのではない。

4. 発音表記における諸問題

前節における各辞書の比較対照の結果をふまえて、本節では発音表記の異同の特徴を分析し、表記が一致しない理由を整理していく。

4.1 /i/, /I/, /i:/ の発音（発音項目①②⑩）

前節比較対照表の発音項目①②⑩にある /i/, /I/, /i:/ の表記に関しては、① /i/ と⑩ /i:/ は J2 の①に関する小さな例外を除いてすべての辞書で表記の統一がとれている。しかし、② /I/ の表記については、英和辞書10冊のうち5冊において /I/ の代わりに /i/ が用いられている。英英辞書4冊は /I/ の表記を採用するという点で共通している。問題となるのは /I/ の代用として /i/ の表記の妥当性である。この点に関して /i:/ との違いも含めて、両者を区別している辞書の解説を引用してみよう。

The sounds represented by /i:/ and /I/ must always be made different, as in **heat** /hi:t/ compared with **hit** /I/. The symbol /i/ represents a vowel that can be sounded as either /i:/ or /I/, or as a sound which is a compromise between them. In a word such as happy /'hæpi/, younger speakers use a quality more like /i:/, but short in duration. (E4)

ここでは、まず heat と hit の違いのように、/i:/ と /I/ との間には発音上の明確な差異があることが述べられ、続いて /i/ の音は /i:/ のようでもあり /I/ のようでもあるものとされている。

次に日本語の辞書からの解説である。

〔弱母音とは弱アクセントを受け弱く発音される母音のことである。〕 /I/ と /u/ の記号は強母音にも弱母音にも使われるが、/i/, /ə/, /æ/, /u/, /ju/, /ju/ は常に弱母音を表す。(J4)

〔/i/ は〕語の最後と母音の前に現れる弱母音で、語末では長めの弱い「イー」、母音の前では短い「イ」でよい。(J4)

ここでは E4 よりも詳しい解説がなされ、/I/ は強母音にも弱母音にも使用可能であるが、/i/ は単語の最後または母音の前にのみ現れる弱母音であるとされている。これが英和5冊、英英4冊において /I/ と /i/ が使い分けられている理論的根拠であるといっていよう。/I/ の記号を用いていない英和5冊においては、強母音の位置においても /i/ が使われていることになり、その根拠は理論的というよりは学習者の便宜上、あるいは、以下、

竹林(1996)が述べているように、旧来の表記方法を慣習的に踏襲している可能性もある。

母音の長短という点を重視して簡略表記をすると [sit と seat は] /'sit/ と /'si:t/ となる。これがジョーンズ式 [英国の音声学 者 Daniel Jones の考案による発音表記方式] である。いっぽう舌の位置が高いか低い か (および緊張しているか弛緩しているか) を重視して簡略表記すれば /'sɪt/ と /'sɪt/ となる。これは Kenyon が彼の発音辞典 *PDAE* において採用した方式で、ケニオン方式 (Kenyonian system) と呼ばれることがある。両者とも簡略表記 (音素表記) という点では筋が通っているが、実用的な発音表記となるとそれぞれに難点がある。/'sit/ 対 /'si:t/ 方式だと学習者は両方の /i/ は同じ母音で、ただ長さが違うだけだと思う。反対に /'sɪt/ 対 /'sɪt/ だと特に日本人は後者も短い母音だと思い込んでしまう。Gimson はこの両者の母音の相違点を2つとも表記の上に明示して /'sɪt/ 対 /'si:t/ という方式を採用した。これだと上記のような誤解は払拭される。同様な関係が full の母音と fool の母音の間にも存在するので、これも /'fɒl/ 対 /'fu:l/ のように表記される。(竹林1996)

4.2 /u/, /ʊ/, /u:/ の発音 (発音項目⑨⑩⑳)

発音項目⑨ /u/, ⑩ /ʊ/, ㉔ /u:/ の発音に関しては、上記 /i/, /ɪ/, /i:/ に関するのとまったく同じことが繰り返されている。J1, J3, J7, J8, J9 の5冊においては表記の上で /u/ と /ʊ/ の区別がつけられていない。/u/ は「/ʊ/ が弱く発音されたもので、母音の前と語末では /u/ となる」(J4) という性質は /i/ と /ɪ/ の関係と同じである。/ʊ/ と /u:/ の関係については上記の竹林(1996)の説明の最後にも触れられている。E4 でも /i:/ と /ɪ/ と /i/ に関する解説の直後で /u:/, /ʊ/, /u/ の違いについて説明がある。

In the same way, the two vowels represented /u:/ and /ʊ/ must be kept distinct but /u/ represents a weak vowel that varies between them. (E4)

ここでは /u:/ と /ʊ/ が長さの違いだけではなく音としても違いがあること、そして weak vowel という表現を用いて /u/ の性質が述べられている。

4.3 米語と英語の発音の違い

英語学習辞書の発音表記を複雑にしている最大の要因はすべての辞書が米音と英音を同

一方式で現す二方言的表記を採用している点にあると思われる。二方言的表記は米音において母音がR音性化する現象と、まったく異なる母音に置き換えられる現象を表記するための方式であるが、使用される記号が他の音を表記するのに用いられる記号に類似していたり、あるいは、英和辞書と英英辞書との間で同じ音を表記するのにまったく異なる記号を用いているために学習者の混乱を招く要因となっている。以下、R音性化母音の表記と米音と英音で規則的置換関係にある母音の表記について整理していく。

4.3.1 R音性化母音（発音項目⑮ /əɹ/, ⑰ /ɑ:ɹ/, ⑳ /ɔ:ɹ/, ㉑ /ə:ɹ/）

R音性化母音には4種類があり、前節の比較対照表における発音項目の順番に並べると /əɹ/, /ɑ:ɹ/, /ɔ:ɹ/, /ə:ɹ/ となる。これら4つの発音の表記方法は辞書によってかなりのばらつきがあるため混乱を招く要因となりやすい。以下、それぞれの音を各辞書がどのように表記しているか整理してまとめておく。なお、/əɹ/に関しては、R音性化した米音とR音性化しない英音をそれぞれ別個に表す表記（⑭と⑰）があり、/ə:ɹ/に関しても同様の表記（㉑と㉒）がある。また、比較対象表において[タイプⅠ]、[タイプⅡ]というラベルをつけたように、/əɹ/, /ɑ:ɹ/, /ɔ:ɹ/, /ə:ɹ/の4つのR音性化母音には、それぞれ「米英異音」を必ず表すものと、「米英異音あるいは米英共通音」（語末で使われ、続く単語の語頭が母音である場合に、英音においてもR音性化が起こるもの）を表すものがある。下の表では⑮と⑯、⑰と⑱、⑳と㉑、㉒と㉓のペアとなっている。

発音項目	方 言	発音記号表の表記法	本文中のその他の表記法
⑭ /ə/	英音	/ə ə/	/əɹ/, /əʳ/, /əɹ ə/
⑮ /əɹ/	米英異音	/əɹ/, /əʳ/, /ə ə/	/əɹ ə/
⑯ /əɹ/	米英異音か米英共通R音	発音記号表にはない	/ə əʳ/, /əʳ/, /ə(r)/
⑰ /ə/	米音	/ə/, /ə ə/	/əɹ/, /əʳ/, /əɹ ə/, /ə(r)/
⑱ /ɑ:ɹ/	米英異音	/ɑ:ɹ/, /ɑ:ʳ/, /ɑə/	/ɑ:ɹ ɑ:/
⑲ /ɑ:ɹ/	米英異音か米英共通R音	発音記号表にはない	/ɑ:ɹ ɑ:ʳ/, /ɑ:ʳ/, /ɑ:(r)
㉑ /ɔ:ɹ/	米英異音	/ɔ:ɹ/, /ɔ:ʳ/, /ɔə/	/ɔ:ɹ ɔ:/
㉒ /ɔ:ɹ/	米英異音か米英共通R音	発音記号表にはない	/ɔ:ɹ ɔ:ʳ/, /ɔ:ʳ/, /ɔ:(r)/
㉓ /ə:ɹ/	米英異音	/ə:ɹ/, /ə:ʳ/, /ə: ə:/, /ɜ:ʳ/	/ɜ: ɜ:/
㉔ /ə:ɹ/	米英異音か米英共通R音	発音記号表にはない	/ɜ: ɜ:ʳ/, /ɜ:ʳ/, /ɜ:(r)
㉕ /ə:/	米音	/ə: ə:/, /ɜ:/	/ə:ɹ/, /ə:ʳ/, /ɜ:ʳ/, /ɜ:ɹ ɜ:/
㉖ /ə:/	英音	/ə: ə:/, /ɜ:/	/ə:ɹ/, /ə:ʳ/

4.3.2 規則的置換関係のある母音

上記のR音性化母音以外で米音と英音の間に規則的な置換関係があるものを以下にまとめておく。対照しやすいように発音項目の順番ではなく、対応しあう米音、英音の順に並べなおしてある。

発音項目	方言	発音記号表の表記法	本文中のその他の表記法
⑤ /æ/	米音	/æ a:/	/æ/
⑳ /ɑ:/	英音	/æ a:/	/ɑ:/
⑥ /ɑ/	米音	/ɑ/, /ɑ ɔ/, /ɑ(ɔ) ɔ/, /ɑ:/	
⑦ /ɔ/	英音	/ɑ ɔ/, /ɑ(ɔ) ɔ/, /ɔ/, /ɒ/	/ɑ/
㉔ /ɔ:/	米音	/ɔ: ɔ/, /ɔ(ɔ)/, /ɒ:/	/ɑ:/, /ɔ:/
⑧ /ɔ/	英音	/ɔ: ɔ/, /ɔ(ɔ)/	/ɒ/
㉒ /ə:r/	米音	/ə:r/, /ə:r ʌr/	/ə:r/, /ɜ:r/, /ɝ:r/
㉑ /ʌr/	英音	/ə:r ʌr/	/ʌr/

4.4 英和辞書と英英辞書それぞれ特有の表記

海外の英英辞書では、日本の英和辞書にはない発音記号が使われている。英英辞書と英和辞書を対照して利用する場合には混乱を招く原因となる可能性がある。同じ音に対する両者の表記の違いの対応関係を簡略化してまとめると以下ようになる。

発音項目	方言	英英辞書の発音記号	英和辞書の発音記号
⑦ /ɔ/	英音	/ɒ/	/ɔ/
㉔ /ɔ:/	米音	/ɔ:/, /ɒ:/, /ɑ:/	/ɔ:/
㉘ /ə:r/	米英異音	/ɜ:r/, /ɜ: ɜ:/, /ɜ:r ɜ:/	/ə:r/, /ə':/, /ə: ə:/
㉙ /ə:r/	米英異音か米英共通音	/ɜ: ɜ:r/, /ɜ:r/, /ɜ:(r)/	/ə:r/, /ə':/, /ə: ə:/
㉚ /ə:/	米音	/ɜ:/, /ɜ':/, /ɜ:r/	/ə:/, /ə:r/, /ə':/
㉛ /ə:/	英音	/ɜ:/, /ɜ':/	/ə:/, /ə:r/, /ə':/
㉜ /ə:r/	米音	/ɜ:r/, /ɜ:r/	/ə:r/, /ə:r/

4.4.1 英音 /ɔ/ の表記：/ɒ/ と /ɔ/

⑦の英音 /ɔ/ に関しては、英和辞書の記号 /ɔ/ と英英辞書の記号 /ɒ/ が一対一対応になっている。

4.4.2 米音 /ɔ:/ の表記：/ɔ:/, /ɒ:/, /ɑ:/ と /ɔ:/

㉔の米音 /ɔ:/ に関しては英和辞書においては表記が統一されているが、英英辞書にお

いては、3種類の異なる記号，すなわち異なる音声があてられている。

4.4.3 R音化母音の表記の違い

⑳以下に関しては，記号の形に注目して整理すると，英和辞書における /ə:|ə:/ が英英辞書における /ɜ:|ɜ:/ に対応するため， /ə:/ = /ɜ:/， /ə:/ = /ɜ:/ という関係がある。また，英和辞書では /ə:/ から長音記号を除いた /ə/ も使われるが，英英辞書では長音記号のない /ɜ/ は使われず，そのかわりに /ə/ が使われることがある（E1）。同様に，英英辞書の発音記号表には /ɜ/ は存在せず， /ə/ が使われる。

上記の例からもわかるとおり，R音化性母音を表記するのに英英辞書ではイタリック体の /r/ を使う慣習はなく，E1，E3，E4 では主に「母音 + /r/」を使い，E2 は上付き文字の /r/ を採用している。E1 は発音項目⑮⑯の /ər/ の米音として /ə/ の記号も用いている。これに対し英和辞書のR音性化母音表記はイタリック体の /r/ を使って「母音 + /r/」とするのが主流である。

4.5 英和辞書における表記の違い

4.5.1 R音性化母音の表記

日本で出版されている英和辞書の間で顕著な違いが見られるのはR音性化母音の表記方法である。サンプル10冊のうち7冊はイタリック体の /r/ を使って表記しているが，J3 は上付き文字の /r/ を使う方式を採用し，J4 と J5 は米音の /ə/ を使用することで， /ə | ə/， /ə: | ə:/ の併記方式か，あるいは， /əə/ のように「母音 + ə」の二重母音表記によって他のR音化性母音を表記している。J3 における上付き文字の /r/ は J4，J5 以外の他の辞書におけるイタリック体の /r/ に読み替えることができるという親近性がある。ただし， /əː/ と /əː:/ は発音記号表に記載され，独立した母音と考えられているので， /əːː/， /əːː:/ とは異なって，母音に補助記号の /r/ を追加したものではない。 /əː:/ の /r/ が長音記号の後ろではなく母音の直後につけられていることがこれを示している。

このように J4 と J5 以外の英和辞書はR音性化母音にイタリック体の /r/ を用いることで，すべてのR音性化母音を米英併記せずにすませている。これに対して J4 と J5 では米音に固有の音である /ə/ を使っているために， /ə | ə/， /ə: | ə:/ という米英併記が必要となる。

4.5.2 母音+子音 /r/ の表記

発音項目⑫の英音 /ʌr/ とそれに対応する発音項目⑬の米音 /ə:r/ の扱いに関して各英和辞書の間でばらつきがある。/ʌr/ と /ə:r/ を対応する母音として発音記号表に記載しているのは J2, J7, J8 であり、/ʌr/ は記載せずに /ə:r/ のみを記載しているのが J1 である。その他の辞書ではこれら 2 つの音を独立した母音とはしないで、英音では短母音 /ʌ/ + 子音 /r/, 米音では長母音 /ə:/ + /r/ もしくは長母音 /ə:/ + /r/ (J4 と J5) とみなしている。

5. 教育上の効率を上げるための合理的な発音表記の検討

本論では英語の発音教育において発音記号が十分に活用されにくいのは、各辞書の間に表記のばらつきがあるからではないかという疑問を前提としている。本節では今回の比較対照作業を通じて得た情報をもとに、教育上の効率を上げるための発音表記統一の可能性を考察してみたい。

5.1 各学習辞書の比較対照から見る諸問題と解決策の提案

5.1.1 /i/, /I/, /i:/ および /u/, /u/, /u:/ の発音表記

/i/, /I/, /i:/ および /u/, /u/, /u:/ の発音表記の発音表記に今回サンプルとした英和辞書の間でばらつきがあることをすでに指摘した。英和辞書 5 冊と英英辞書 4 冊ではこれら 6 個の発音記号がすべて採用され、残りの英和辞書 5 冊では /I/ と /u/ が採用されていない。どちらがよいのかを実践的な立場から判断するには、6 個の音を弁別する理論的必然性があるか否かということと教育上の利便性を考慮するべきであろう。すでに引用文にあげておいたが、6 個の音を区別する発音記号を採用すべきとする理論的根拠は、まず第 1 にこれらの音が音声としての明確な差異を有しているということであり、第 2 は、発音表記上、/i/ と /u/ は常に弱母音を意味するので強いアクセントを受ける位置では使うべきではないということである。発音記号の数が少なければ学習者の負担は減るが、学習者が長期的に英語学習を継続することを前提とするならば、正しい発音の差異を示す発音表記を採用する方が得策だと思われる。

5.1.2 R 音性化母音の発音表記

すでに見てきたとおり R 音性化母音の表記には顕著なばらつきがある。これを教育実践

のために合理化する上で最初に考えておきたいのは、日本国内で出版されている英和辞書と海外で出版されている英英辞書との間で採用する発音記号が異なるという点である(4.4)。英英辞書には英和辞書には見慣れない /ɒ/, /ɒ:/, /ɜ:/, /ɜ:/ という4つの発音記号がある。これらを英和辞書が採用するべきであるかどうかだが、「/ɒ/= /ɔ/」, 「/ɒ:/ = /ɔ:/」, 「/ɜ:/ = /ə:/ (/ə:r/, /ə':/)」, 「/ɜ:/ = /ə:r/ (/ə':/, /ə:/)」という対応関係が確立していることを考えると、あえて英英辞書の表記に変更するべき積極的な理由はない。

次に国内の英和辞書に関しては、R音性を明示する方式として、イタリック体の /r/, 上付き文字の /ʳ/, カギ付きシュワー /ə/ の3つがある。イタリック体の /r/ または上付き文字の /ʳ/ を使う場合にはそのまま発音すれば英音となる母音をひとつ使えばよいが、カギ付きシュワー /ə/ はR音性化された米音そのものを表すために、これを使う場合には米音と英音を併記する方式をとらざるをえない(J4とJ5における /ə|ə/ など)。どの方式を採用するかは、学習者にとってのなじみ安さや筆記の容易さなど、教育上の利便性の観点から判断するのが得策と思われる。10冊中7冊の英和辞書が採用しているイタリック体の /r/ 方式は妥当な選択ではないだろうか。

R音性化母音の表記に関して1つ付け足しておくべきことがある。それは、R音性化母音の2つの性格を明示する表記方法についてである。R音性化母音は単語の途中で使われる場合には米音において常にR音性化され、英音と異なる音になる。しかし、単語の末尾で使われ次の単語の語頭が母音の場合には、英音においてもR音性化が起こる。前者の例が perhaps /pərhæps/ における /ər/ であり、この場合、米音と英音は異なる音となる(米音 /pərhæps/ と英音 /pəhæps/)。別の例は far out /fɑ:r aʊt/ などに見られ、ここでは far の語末の /ɑ:r/ に out /aʊt/ という母音で始まる単語が続いているため、米音でも英音でも /ɑ:r/ はR音性化される。英英辞書 E1, E2, E3 の本文中の記述では補助的記号 /ʳ/ や (r) を使うことによって両者の違いがわかるようになっている。例えば E4 において、語中にR音性化母音がある bird という単語は bɜ:rd | bɜ:d と米英併記されるのだが、R音性化母音が語末にある fur という単語は /fɜ:(r)/ のように表記される。これを英和辞書で見ると、どちらも /ər/ としているものがほとんどである。英英辞書におけるように記述方法を変えた方が学習者にとっては親切だろう。

5.1.3 その他の米音と英音の間に規則的置換関係のある単母音の発音表記

米音と英音の間に規則的置換関係のある単母音の表記方法として、英和辞書の多くが併記方式を採用して米音と英音の違いがはっきり分かるようにしている。しかし J1 と J2

では /ɑ|ɔ/ を本文中で併記せずに発音解説の中で両者の置換関係が説明されているだけである。他の米英対応関係を併記している以上、/ɑ|ɔ/ に関しても併記した方が学習者にとっては分かりやすいと思われる。

/ɔ:|ɔ/ の置換関係を表記するのに併記方式を用いず、丸括弧の中に長音記号を入れて /ɔ:(ɔ)/ としているのが J1, J3, J8 であるが、この丸括弧は「省略可能」という意味ではなく、「米音では /ɔ:/ と発音し、英音では /ɔ/ と発音する」という意味で理解されなければならないので、やはり併記方式にした方がわかりやすいのではないだろうか。

発音項目⑭と⑫の米英対応関係、すなわち /ɑ:r|ʌr/ に関しては発音記号表に併記方式で記載している辞書はサンプルの中で J7, J8 の2冊だけとなっている。/ɑ:r/ という音は、必ず発音される子音 /r/ が、通常は単独で発音記号表に掲載されない /ɑ:/ (R音化母音の英音) に追加されたものである。論理的に多少不自然の観はあるが、この併記方式には実践上の利点がある。つまり、/ɑ:r/ と /ʌr/ の規則的置換関係がはっきり明示され、また、他の米英置換関係にある母音 (4.3.2) と表記方法を統一することができるからである。

以上、英語学習辞書における単母音の発音表記の違いに関する考察に基づいて、教育実践上合理的と思われる発音記号表の試案を次ページに示し、本論のしめくくりとしたい。

教育用発音記号表（試案）
単母音（短母音・長母音・R音化性母音・母音＋子音 /r/）

近い響き	記号	用 例	備 考
ア	/æ/	bag /bæg/ cat /kæt/	
	/ʌ/	come /kʌm/ must /mʌst/	
	/ə/	about /əbaʊt/ collect /kəlekt/	弱い「ア」
アー	/ɑ:/	calm /kɑ:m/ father /fɑ:ðər/	
アー	/ɑ:r/	① arm /ɑ:rm/ heart /hɑ:rt/	米で常に /r/ 発音
	/ɑ:r*/	② car /kɑ:r*/ far /fɑ:r*/	*英も母音の前で /r/ 発音
ア	/ər/	① perhaps /pərhæps/ Saturday /sætərdei/	米で常に /r/ 発音
アー	/ər*/	② cover /kʌvər*/ sister /sistər*/	*英も母音の前で /r/ 発音
アー	/ə:r/	① bird /bɜ:rd/ early /ɜ:rlɪ/	米で常に /r/ 発音
	/ə:r*/	② fur /fɜ:r*/ occur /əkə:r*/	*英も母音の前で /r/ 発音
イ	/ɪ/	busy /bɪzi/ sit /sɪt/	
	/i/	create /kri:ɛt/ happy /hæpi/	弱い「イ」
イー	/i:/	meat /mi:t/ people /pi:pl/	
ウ	/ʊ/	book /bʊk/ put /pʊt/	
	/u/	actual /æktʃuəl/ influence /ɪnfluəns/	弱い「ウ」
ウー	/u:/	school /sku:l/ too /tu:/	
エ	/e/	bed /béd/ end /énd/	
オー	/ɔ:/	all /ɔ:l/ story /stɔ:ri/	
オー	/ɔ:r/	① morning /mɔ:rnɪŋ/ warm /wɔ:rm/	米で常に /r/ 発音
	/ɔ:r*/	② four /fɔ:r*/ store /stɔ:r*/	*英も母音の前で /r/ 発音
ア オ	/a ɔ/	box /báks bóks/ got /gát gót/	米/a/は必ず英/ɔ/
ア アー	/æ ɑ:/	ask /æsk ɑ:sk/ laugh /læf lə:f/	米/æ/は必ず英/ɑ:/
オー オ	/ɔ: ɔ/	dog /dɔ:g dóg/ long /lɔ:ŋ lón/	米/ɔ:/は必ず英/ɔ/
アー ア	/ə:r Δr/	courage /kɔ:riɪdʒ kΔriɪdʒ/ hurry /hə:ri hΔri/	米/ə:r/は必ず英/Δr/

- ・R音性化母音が語末にくる例では、次に続く語の語頭が母音である場合にイギリス発音でも /r/ を発音することを示すために /r*/ とした。

参 考 文 献

- [1] 堀内克明 (編). 1999年. 『旺文社新英和中辞典』. 初版. 旺文社. [J1]
- [2] 花本金吾ほか (編). 2003年. 『旺文社レクシス英和辞典』. 初版. 旺文社. [J2]
- [3] 山岸勝榮ほか (編). 2006年. 『スーパー・アンカー英和辞典』. 第3版. 学習研究社. [J3]
- [4] 竹林滋ほか (編). 2006年. 『新英和中辞典』. 第7版. 研究社. [J4]
- [5] 竹林滋ほか (編). 2005年. 『ルミナス英和辞典』. 第2版. 研究社. [J5]
- [6] 井上永幸, 赤野一郎 (編). 2003年. 『ウィズダム英和辞典』. 初版. 三省堂. [J6]
- [7] 國廣哲彌ほか (編). 2005年. 『小学館プログレッシブ英和中辞典』. 第4版. 小学館. [J7]
- [8] 小西友七, 南出康世 (編). 2001年. 『ジーニアス英和辞典』. 第3版. 大修館書店. [J8]
- [9] 浅野博ほか (編). 2002年. 『アドバンストフェイバリット英和辞典』. 初版. 東京書籍. [J9]
- [10] 田中茂範ほか (編). 2003年. 『Eゲイト英和辞典』. 初版. ベネッセコーポレーション. [J10]
- [11] Walter, Elizabeth et al. (eds.). 2005. *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 2nd ed. Cambridge, UK : Cambridge University Press. [E1]
- [12] Sinclair, John et al. (eds.). 2006. *Collins Cobuild Advanced Learner's English Dictionary*. 5th ed. Glasgow, UK : HarperCollins Publisher. [E2]
- [13] Summers, Della et al. (eds.). 2003. *Longman Dictionary of Contemporary English*. 4th ed. Harlow, UK : Pearson Education Ltd. [E3]
- [14] Wehmeier, Sally et al. (eds.). 2005. *Oxford Advanced Learner's Dictionary*. 7th ed. Oxford UK : Oxford University Press. [E4]
- [15] 竹林 滋, 斎藤弘子. 1998年. 『改訂新版 英語音声学入門』. 大修館書店.
- [16] 竹林 滋. 1996年. 『英語音声学』. 研究社.
- [17] Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Harlow, UK : Longman.
- [18] Gimson, A. C.. 竹林滋 (訳). 1983年. 『ギムスン 英語音声学入門』. 金星堂.
- [19] 小泉 保, 牧野勤. 1971年. 『英語学体系 I 音韻論 I』. 大修館書店.